ＤＮＡが語る日本人の祖先

あなたは縄文人/弥生人/古墳人/それとも？？？

2023 年 10 月 2 日　　横浜歴史研究会　　加藤 英雄

はじめに.

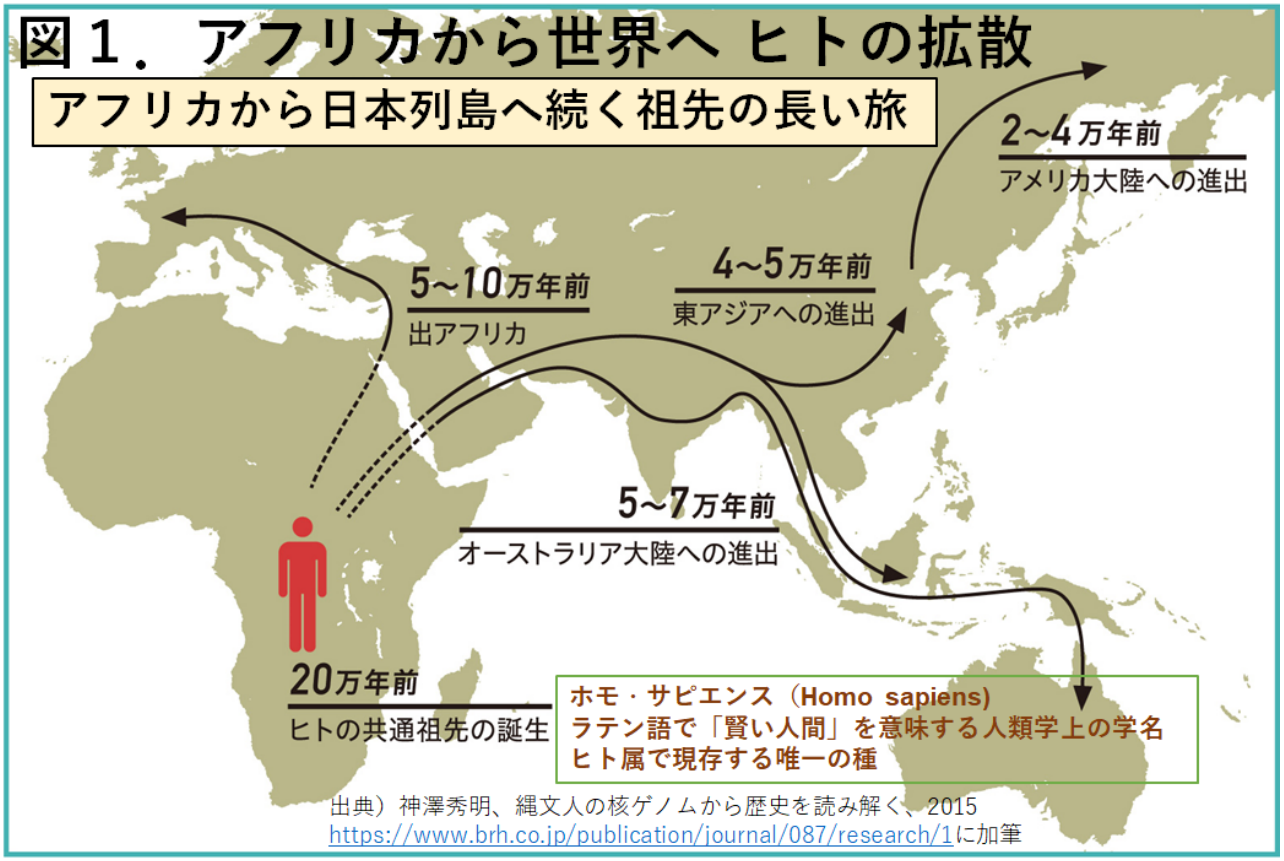
自然災害や気候変動だけでなく、前世紀の遺物とさえ思われていた侵略戦争までもが身近に起き、不安さえ覚える程激動する時代となった今、数万年におよぶ苦難の旅を経てこの日本列島に到達し、日本という国の礎を築いた祖先の悠久の旅路に思いを馳せるとともに、１万２千年もの間戦争のない平和な社会と、世界四大文明に匹敵する程の豊かな文化遺産を築いた**縄文時代**、渡来人と融合して新たな発展を遂げた**弥生時代・古墳時代**の先人達の遺した誇るべき遺産、現代に生きる私たちが心身ともに祖先から受け継いだ DNA を通して、改めて日本という国や日本人のありようを考える良い機会と思い本稿を企画した。

また、2021 年 7 月に**北海道・北東北の縄文遺跡群**が**世界遺産**に登録されたことからも分かるように、日本の古代史は一時的なブームではなく世界的に誇れる**文化遺産**と評価されて然るべきと強く思う。そしてその DNA が私たちの体内に息づいていることも。

１．ヒト（現生人類：ホモサピエンス）の誕生と 出（しゅつ）アフリカ、日本列島へと続く祖先の長い旅

およそ 20 万年前にアフリカで誕生した私たち**現生人類（ヒト：ホモ・サピエンス**:Homo sapiens）が図１で示すように、5~10 **万年前**に故郷を出て世界中に拡散して行ったことは（**出アフリカ**）、出土物や 1,980 年以降研究が進んだ**遺伝子ＤＮＡゲノム解析**で明らかになっている。そして私たちの**祖先・縄文人**も想像を絶する長い旅を経て、4~5 万年前には**北東アジア人**や**東南アジア人**と分かれ、日本列島に到達し生活を始めたことが判明している。（＊１）

図１．アフリカから世界へ ヒトの拡散



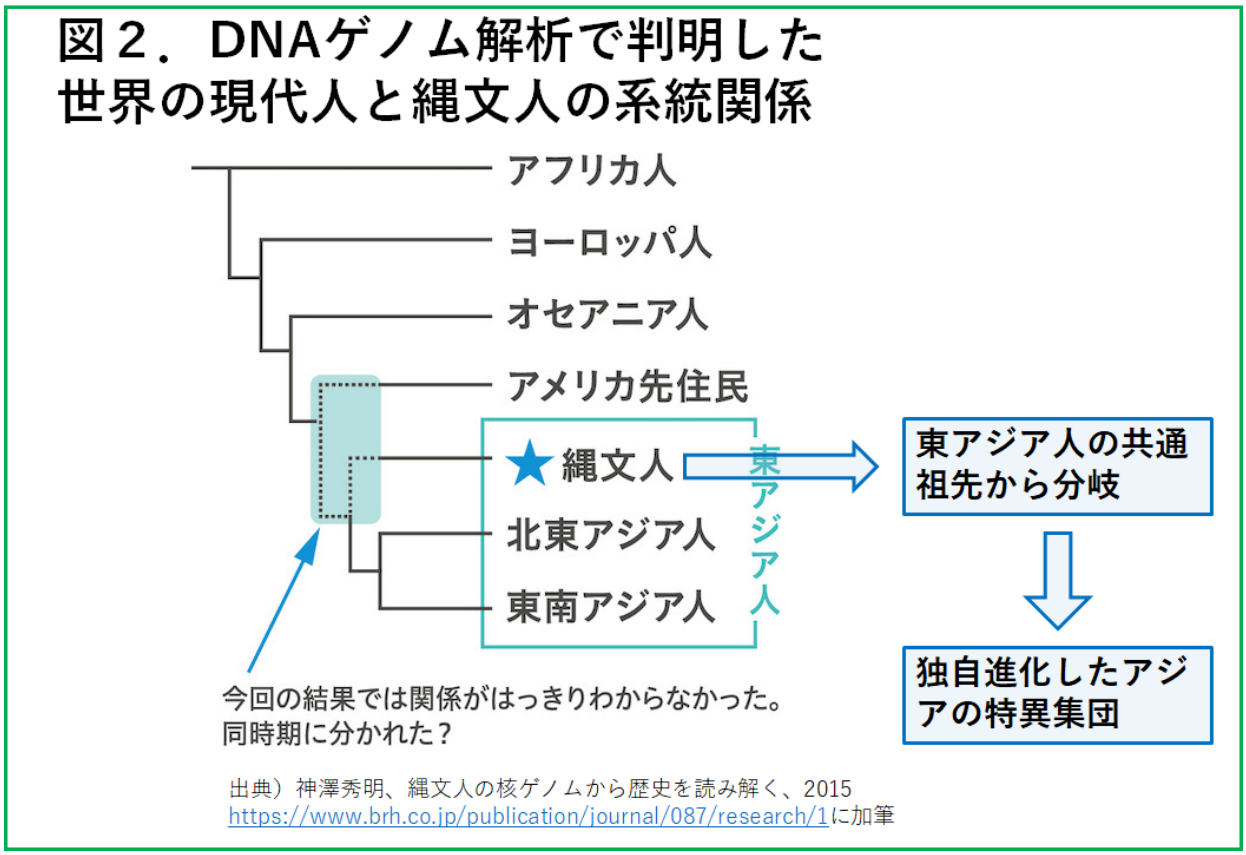
２．ＤＮＡゲノム解析で判明した世界の現代人と縄文人の系統関係

従来の発掘された人骨や土器などを調べる**考古学**や**古人類学**に代わり、新たに登場した古代の遺骨に残された**遺伝子情報**を解読するＤＮＡ**ゲノム解析**によると、私たち**ヒト**は出生地アフリカを 5~10 万年前に出発した後、**アフリカ**

人、**ヨーロッパ人**、**オセアニア人**および、**アメリカ先住民**と**東アジア人**のグループに分かれた（年代的に特定はできないが）。さらに、東アジア人は**縄文人**、**北東アジア人**、**東南アジア人**に分岐したと考えられている（図２）。

従来、縄文人は北東アジア人や東南アジア人から分岐したと考えられていたが、DNA 配列を現代人と比較・解析した結果、縄文人はいずれにも属さず、およそ 15,000～20,000 年前に大陸の基層集団から分かれ、東アジア人の共通祖先から分岐し独立した存在であるという系統関係が明らかになってきた。（*１）

図２．ＤＮＡゲノム解析で判明した世界の現代人と縄文人の系統関係



３．日本列島人の成り立ちと二重構造モデル

（１）縄文時代の始まりと交易ネットワーク

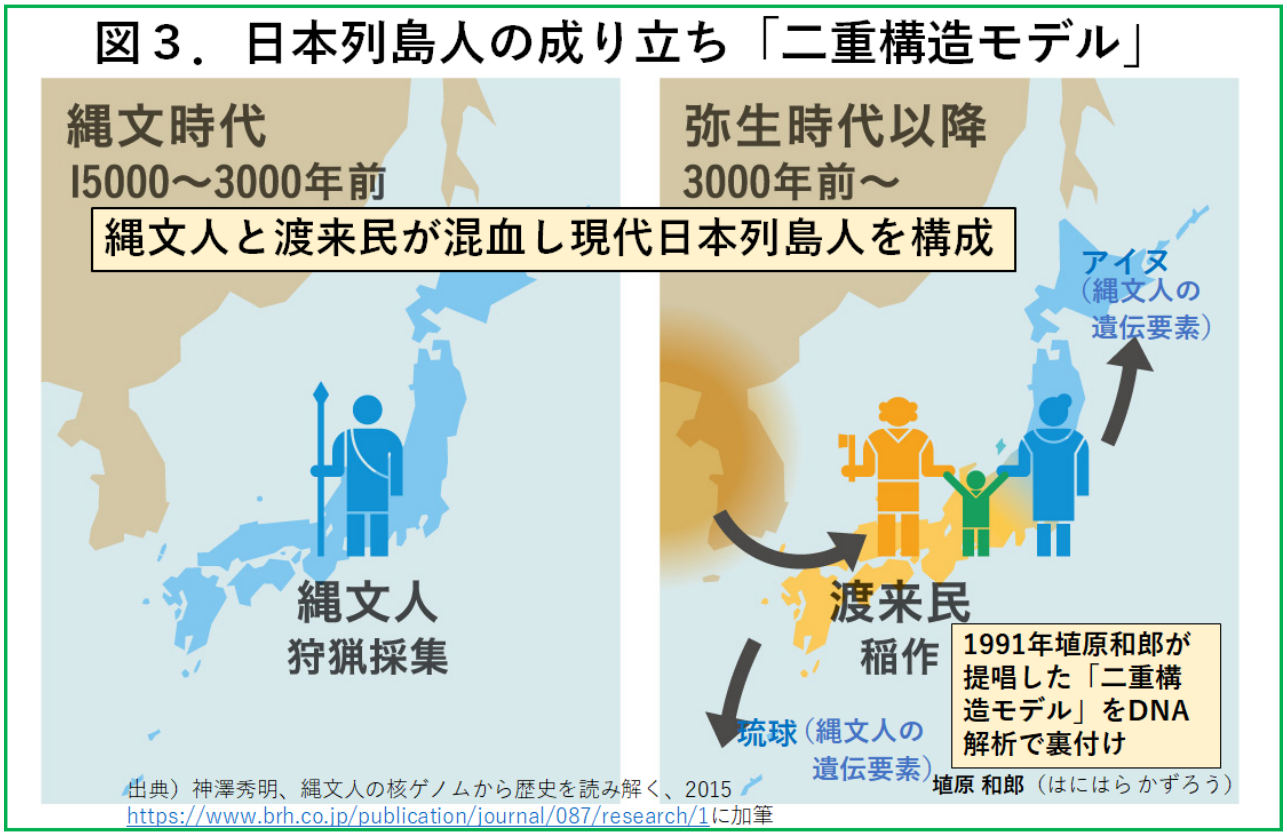
およそ１万数千年前、**氷河期**が終るとともに**海進化**が進み、日本列島は大陸と切り離され、ドングリや栗やクルミが実る**落葉広葉樹**の森や、魚貝類に恵まれた海や川が広がる豊穣（ほうじょう）な大地となった。温暖な環境にも恵まれ、**狩猟・採集**を基本としつつも**定住生活**が可能となり、争うこともない平和で豊かな**縄文時代**が始まりを告げた。定住と豊かな生活は世界最古級の土器である**縄文土器**を生み出すとともに、自然や万物に宿る精霊を崇拝する**アニミズム**（**精霊信仰**）や、**祖先崇拝・子孫繁栄**に通ずる素朴でユニークな**土偶**等の文化遺産を生み出すこととなる。

また、北から南まで日本列島各地の集落間の交流も盛んに行われ、沖縄の貝で作ったアクセサリーが東北や北海道で見つかり、新潟・糸魚川（いといがわ）の**ヒスイ**や長野の**黒曜石**等も全国に流通していた。およそ 1 万年も前に全国各地の集落が互いに特産物を融通し合い協力する**交易ネットワーク**が出来上がっていたのは驚きである。

（２）二重構造モデルと日本列島人の成り立ち

現代**日本列島人**の起源については、1991 年に**埴原和郎**（はにはらかずろう）により提唱された**二重構造モデル**がある。図３に示すように、日本列島に住んでいた第一波の移住民である**縄文人**と、**弥生時代以降**海を渡ってきた、第二波の移住民である**渡来人**が融和し混血した**二重構造**で形成されたという説であり、列島中心部から離れた北海道の**アイヌ**と**琉球**の集団は縄文人の遺伝要素を多く残すとされる。なお、DNA 解析の結果、二重構造モデルはその妥当性が裏付けられている。（*１）

図３．日本列島人の成り立ち「二重構造モデル」



４．縄文時代から現代にいたる日本人ゲノムの変遷と三重構造モデル

奇（く）しくも二重構造モデルから 30 年後の 2021 年、金沢大学（覚張（がくはり）隆司）やダブリン大学、各種研究機関・博物館等からなる国際研究グループが、世界的な学術誌**「Science Advances」**に**「パレオゲノミクスで解明された日本人の三重構造」**という論文を発表し、現代における日本人集団の遺伝子 DNA ゲノムが図４に示すように、**縄文/弥生/古墳**からなる**３つの祖先集団**で構成された**三重構造モデル**であることを世界で初めて明らかにした。

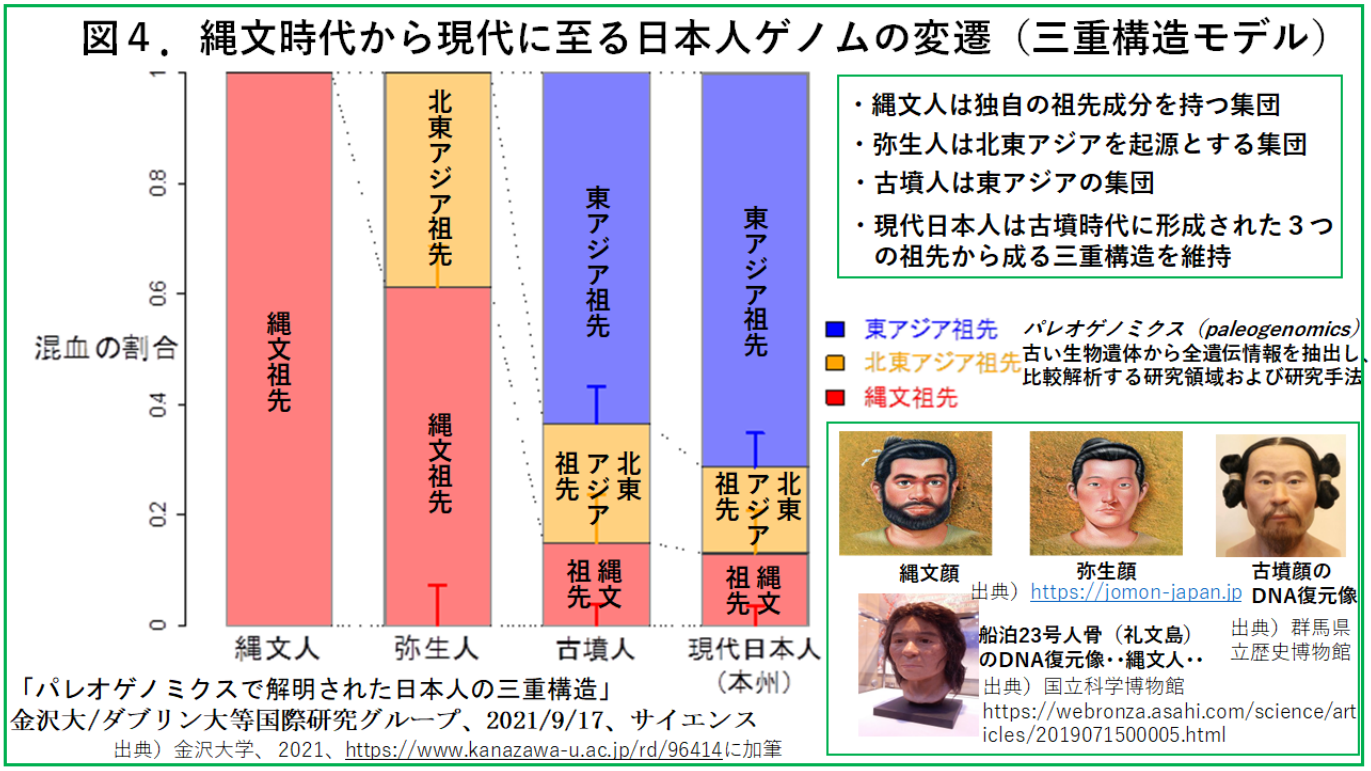
縄文人の祖先集団はおよそ 15,000～20,000 年前に大陸の基層集団から分かれ日本列島に到達したこと、初期集団は 1,000 人程度の小さな集団サイズであったことも判明した。**弥生時代**には**北東アジアに起源**をもつ集団が**稲作**を携えて渡来し、**古墳時代**（３世紀中頃～７世紀頃）には**東アジアに起源**をもつ集団が**織物や土木などの新技術**を持って渡来してきたことが明らかとなった。従来定説のように扱われていた「日本人の二重構造モデル」を補強しさらに発展させた「**日本人の三重構造モデル**」の登場である。（*２）

従来の二重構造モデルでは、日本列島人は縄文人に**弥生時代以降渡来**した集団との融和・混血で形成されたとしか明らかにできなかったものが、古い生物遺体から全遺伝情報を抽出し比較解析する最新の**パレオゲノミクス**（paleogenomics）により、**縄文/弥生/古墳**という３つの**祖先成分**や**現代日本人への影響**が具体的になった。成果は次の４点に集約される。

① **縄文人は独自の祖先成分をもつ（縄文人）**
② **弥生時代には北東アジアを起源とする集団が渡来し混血（弥生人）**
③ **古墳時代には東アジアの集団が日本列島に渡来し混血（古墳人）**
④ **本州における現代日本人集団は古墳時代に形成された３つの祖先から成る三重構造を維持（現代日本人）**

また、中央から遠く離れた北海道の**アイヌや沖縄人**は縄文人の DNA を色濃く残しているが、一見異質に思える**アイヌ音楽**と**琉球・奄美民謡**との演奏が見事に共鳴し合い、現在でも文化的な共通点が見られるのは興味深い。（*３）

図４．縄文時代から現代に至る日本人ゲノムの変遷（三重構造モデル）

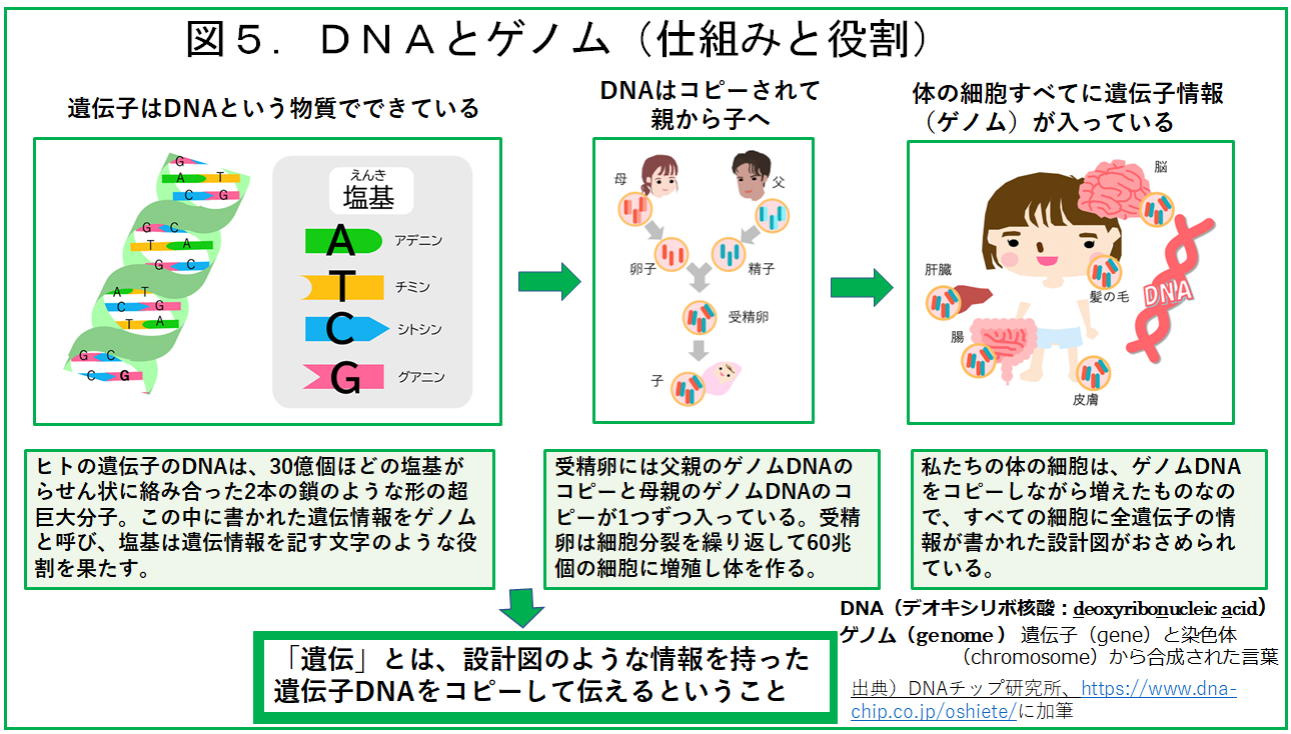


５．ＤＮＡとゲノム（仕組みと役割）

（１）遺伝子とＤＮＡ、ゲノム

ヒトの**遺伝子**はＤＮＡ（デオキシリボ核酸：DeoxyriboNucleic Acid）と呼ぶ物質でできている。図５に示すように、DNA は細胞の中にあり、30 億個の**塩基**がらせん状に絡み合った、2 本の鎖のような形をした巨大分子である。この中に書かれた**遺伝子情報**を**ゲノム**（genome）と呼び、塩基は**A**（アデニン）、**T**（チミン）、**G**（グアニン）、**C**（シトシン）の４種の組み合わせで遺伝情報を記す文字のような役割を果たす。私たちの 60 兆にもおよぶ体のすべての細胞には両親の DNA からコピーされた**遺伝子情報**（**ゲノム**）が入っている。**遺伝**とは設計図のような情報を持った遺伝子 DNA をコピーして親から子に伝えることということができる。（*４）

図５．ＤＮＡとゲノム（仕組みと役割）



６．次世代シークエンサーによるＤＮＡゲノム解析、ノーベル賞受賞と古ゲノム学の発展

（１）ＤＮＡゲノム解析と次世代シークエンサー

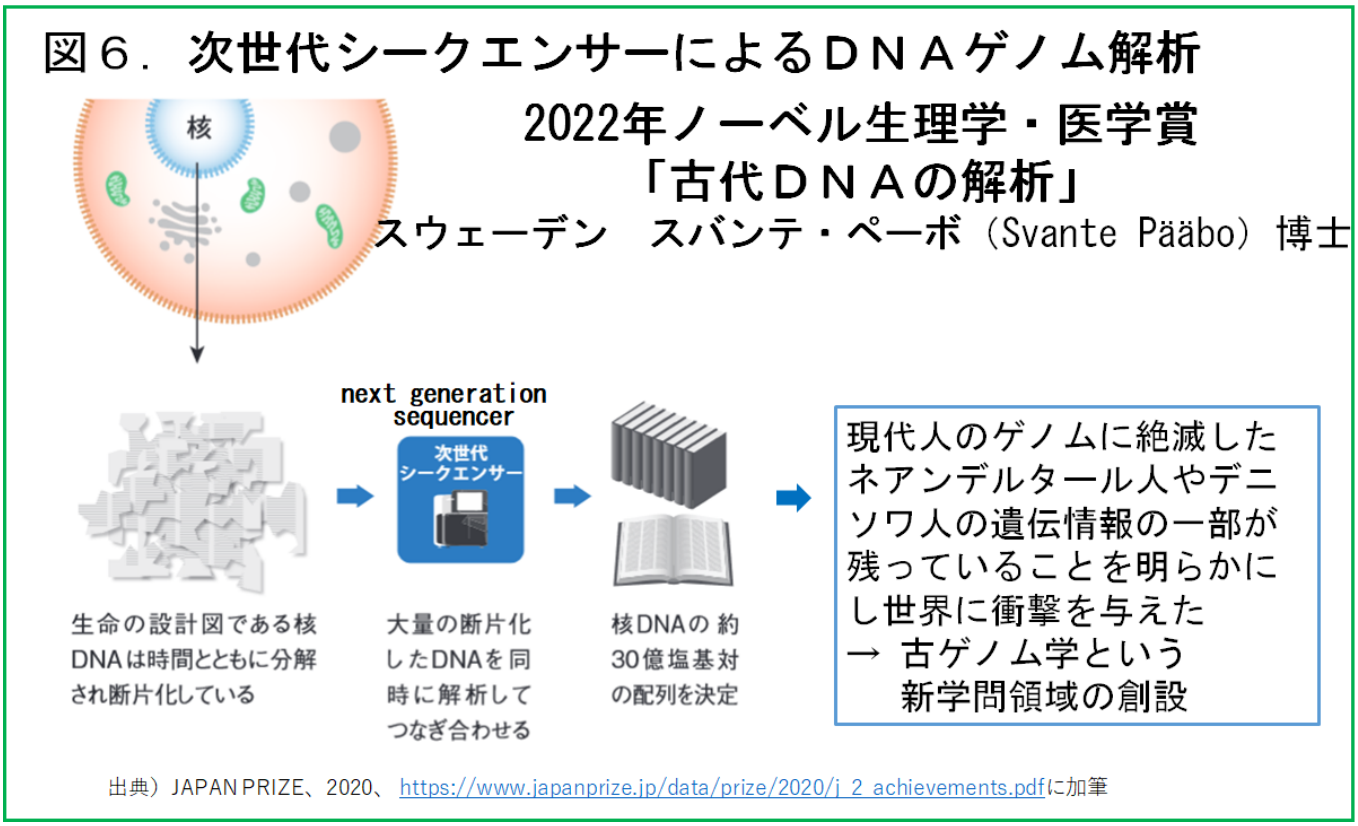
私達のＤＮＡには約 30 億**塩基対**という膨大な量の文書に相当する遺伝情報が含まれている。しかし古代の遺跡から発掘された DNA は損傷が激しく**断片化**されており、破れてバラバラになった文書のようなそのままでは解読できない状態になっている。しかし、大量の断片化された DNA をつなぎ合わせ元通りに復元し解読できれば、これまでの遺跡や骨の形状の研究が主体の**古人類学**では分からなかった、古代の人々のナマの姿を具体的に明らかにすることができるようになる。大量の断片化した DNA を解析しつなぎ合わせ復元できる装置として**次世代シークエンサー**（next generation sequencer）が開発され大きな成果を挙げている。考古学に新たな地平を拓く技術として研究者が**ノーベル賞**を受賞するなど一層の発展が期待出来よう（図６）。

（２）2022 年ノーベル生理学・医学賞受賞「古代ＤＮＡの分析」と新学問領域「古ゲノム学」の発展

2022 年**ノーベル生理学・医学賞**はスウェーデン出身の**スバンテ・ペーボ**（Svante Pääbo）博士の**「古代ＤＮＡの分析」**に与えられた。ペーボ博士は解読した古代人と現代人のゲノムを比較し、現代人のゲノムに絶滅した**ネアンデルタール人**や**デニソワ人**の遺伝情報の一部が残っていることを明らかにした。**現生人類**（ホモ・サピエンス Homo sapiens）と**旧人類**（Archaic humans）が交配していた可能性を示したことで世界に衝撃を与えた。

この研究が発端となり、世界各地の異なる年代の生物遺骸から DNA を取り出し比較・分析する研究が発展し、遺跡や骨の形状からだけでは分からなかった古代の人々の実像や交流・移動がより明らかになった。このような**人類の進化**を解き明かす新しいアプローチの開発と成果に対して**ノーベル賞**が贈られた。また**生物学**や**遺伝学**等の異分野との学際的な研究・協力による、従来からの考古学の枠を超えた**古ゲノム学**という新しい学問領域が生まれた（図６）。

図６．**次世代シークエンサーによるＤＮＡゲノム解析と 2022 年ノーベル生理学・医学賞**



７．縄文時代/弥生時代/古墳時代にみる日本の古代史の特色と意義

縄文時代が小学校の教科書から消えた一時期（2,002 年～10 年間）を経て、近年ようやく縄文を始め日本の**古代史**に対し注目度が上がるようになった。日本の古代史を構成する**縄文/弥生/古墳**それぞれの時代は次のように特色づけられる（図７）。

① 縄文時代　１万年以上にもわたり、世界史上稀な戦争のない平和と、豊かな文化遺産を育んだ時代
② 弥生時代　稲作による富や権力の発生と階層分化、ムラからクニへの発展と戦いの時代
③ 古墳時代　倭（ヤマト）王権の成立と前方後円墳の全国拡大、戦いではなく古墳の壮大さで覇を競う時代

図７．縄文/弥生/古墳時代の象徴と特色

７．１縄文時代（1 万年年以上にわたり、世界史上稀な戦争のない平和と、豊かな文化遺産を育（はぐく）んだ時代）

（１）日本列島の誕生と豊かな恵み（縄文時代のはじまり）

およそ 1 万数千年前**氷河期**が終わり地球は急速に温暖化が進み、 地球上を覆っていた膨大な量の氷が溶け海面が上昇したことで大陸から切り離され、現在のような**日本列島**が誕生した。大陸と隔てる**日本海**は温暖な気候と豊富な海産物を提供してくれる**「恵みの海」**となり、この国土にやって来た縄文人の生活と文化を支えた。

・縄文土器と定住生活

およそ１万５千年ほど前に始まった（年代は諸説あり）縄文時代の名は、世界最古級の**土器**と称される縄目状の紋様が特徴の土器に由来している。土器の発明は食料をナマや焼いて食べるだけの段階を脱し、豊富にとれた栗やドングリのアク抜きや煮炊き調理することで、食生活に大きな変化と向上をもたらし、狩猟・採集の原始的な**移動生活**から安定した**定住生活**への移行を可能にした。また土器は調理だけでなく食料の貯蔵容器としても利用され定住化に貢献した。土器による食生活の安定と向上は豊かな縄文人の生活を支える大きな役割を果たした。

・集落の出現（大規模な東日本と小規模な西日本、落葉樹林と照葉樹林）

定住生活を始めた縄文人は、それまでの少人数グループでの移動生活を脱し、海沿いや川沿いの水や水産資源に恵まれた場所や栗林等の山林資源の近くに集まり、共同体としての**集落**を形成するようになる。集落の中には計画的に**住居**や**集会場**や**祭祀場**（さいしじょう）、**墓地**等が作られ、やがて地域を代表する拠点的な**大規模集落**も現れた。祀（まつ）りの場であるとともに、季節や時刻を測るための日時計も兼ねたような**環状列石（ストーンサークル）**も出現した。

東日本では、堅固な**竪穴**（たてあな）**建物**が整然と並んだ大型の集落が形成されたのに対し、西日本では簡素な作りの小規模な集落が多く見られる。この東西の対照的な違いは、温暖化によって生じた**落葉樹林**と**照葉樹林**という異なる**植生**（しょくせい）の違いにあると考えられる。**栗**や**ブナ**（**ドングリ**）や**クルミ**、**栃**（**トチ**）等豊かな実をつける**落葉広葉樹**は東北地方を中心としたやや寒冷な気候の東日本に多かったのに対し、暖かな気候の西日本に多い**樫**（カシ）や**楠**（クス）等の照葉樹は定住生活を支える程の実をつけることがなく、食料を求めて移動生活を余儀なくされていたと思われる。（*５）

・交易とネットワーク

縄文時代の人々の生活は豊かで、全国の遺跡からは北海道や長野産の黒曜石の矢じりやナイフといった生活用品だ

けでなく、新潟・糸魚川産の**翡翠（ヒスイ）**、沖縄産の大型の貝を加工した**装飾品**なども広く流通していた。中国・長江(ちょうこう)産の**玦状耳飾**（けつじょうみみかざり：イヤリング）も出土するなど、交易ネットワークは国内だけでなく海外にまで及んでいた。

・アニミズム（精霊信仰）

大陸と異なり、狩猟・採集を基本としながらも集団での定住生活と、集団同士争うこともない平和をもたらしてくれた豊かな自然への感謝は尽きない。**八百万の神**（やおよろずのかみ）に象徴されるように、今も日本人の心に根ざす自然や万物への崇拝の念が生まれたのも当然といえよう。このような**アニミズム**（animism）と称される**精霊信仰**や**自然信仰**は後の**神道**につながっていく基礎となっている。

・土偶と祈り（子孫繁栄）

精霊信仰では母性を象徴する**土偶**を使って**子孫繁栄**を祈る儀式がとり行われた。土偶はほとんどが**妊婦**の姿をしているが、何故か破損した状態で見つかることが多い。儀式の終了後妊婦に禍いが及ばないように、身代わりとなって禍いごと破損させられたのであろう。

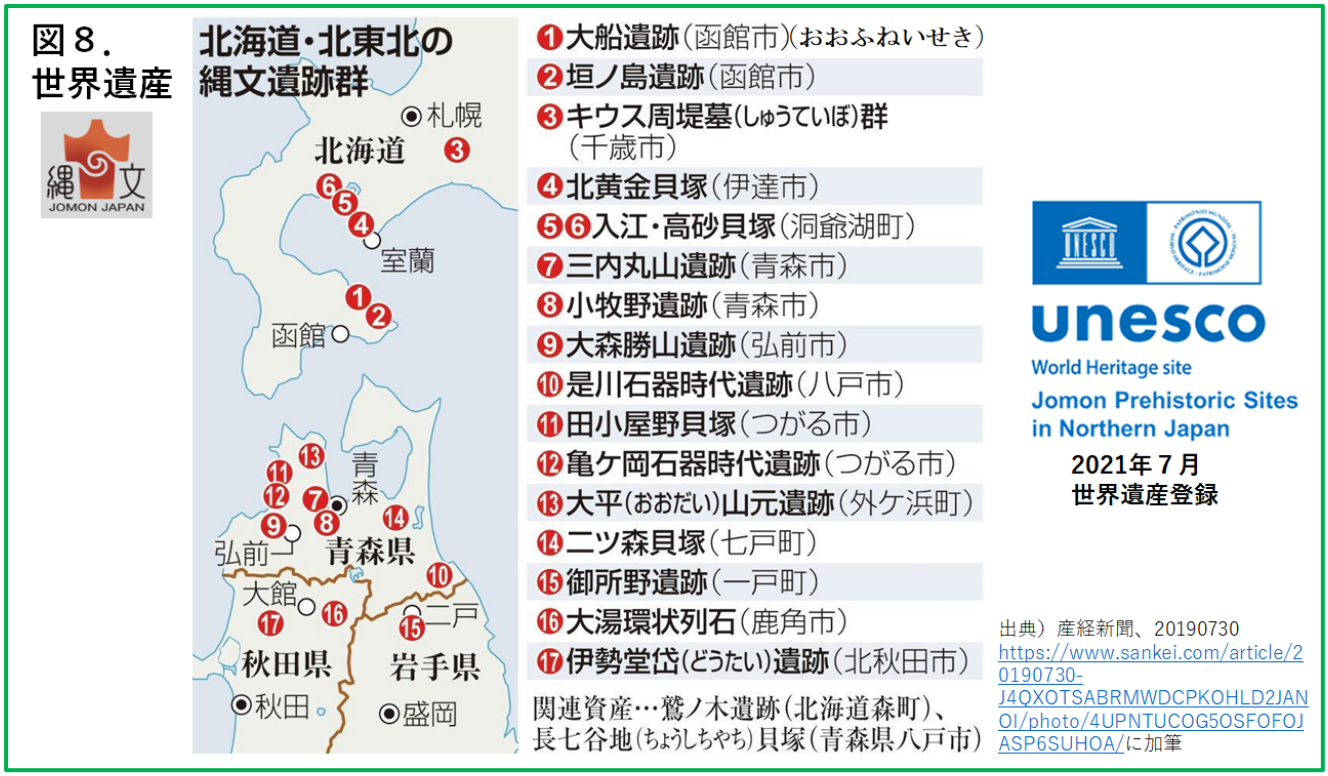
・人を殺す武器のない時代（１万年以上も戦争のない平和）

縄文時代の遺跡からは狩猟のために使う矢じりは発見されても、対人殺傷用の矢じりも殺傷された形跡のある人骨も発見されていない。このような１万年以上もの間、世界史上稀な**戦争のない平和な時代**を築いた縄文人を誇らしく思う。もっと称（たた）えられて良いと思う。

（２）世界遺産 北海道・北東北の縄文遺跡群

2021 年**北海道・北東北の縄文遺跡群**が**ユネスコ世界文化遺産**に登録された。**北海道**と**青森県・秋田県・岩手県**の**東北３県**に残る 17 **の考古遺跡**と**２つの関連資産**から構成されている。ユーラシア大陸と切り離された日本列島で 1 万年以上も安定した定住生活を送り、自然信仰に根ざした豊かな精神文化を築いたことが高く評価された（図８）。

図８．世界遺産 北海道・北東北の縄文遺跡群



・三内丸山（さんないまるやま）遺跡（青森市）

縄文時代を象徴する遺跡として**三内丸山遺跡**をとりあげる。今から 5,900 年前から 4,200 年前まで **1,700 年**もの間、八甲田山を背に陸奥湾を望む 42 ヘクタールもの広大な土地に栄えた**拠点都市**の遺構である。集落は中央に祭祀用か集会用に使われたと思われる高さ 15 メートルに及ぶ**大型掘立柱建物**（ほったてばしらたてもの）や、200 人近く収容可能な**大型竪穴建**

物（たてあなたてもの）、**高床式倉庫**を中心に、**道路・住宅・墓地・ゴミ捨て場**等が整然と配置されている。何よりこの広大で伸びやかな集落が滅びることなく 1,700 年もの永きにわたり繁栄したという事実は、この時代がいかに平和な時代であったかを雄弁に物語っている。しかし後期以降の気候変動による再寒冷化で集落の維持が困難になり姿を消した。　写真出典）Jomon-Japan

７．２弥生時代（稲作による富や権力の発生と階層分化、ムラからクニへの発展と戦いの時代）

弥生時代は紀元前 1,000 年から紀元 300 年までの 1,300 年間といわれているが（諸説あり）、二重構造モデルや三重構造モデルで示されたように、縄文人が暮らすこの地に**北東アジア**から多数の**渡来民**が海を越えてやって来たことで始まった。彼らがもたらした**稲作（水稲）**はそれまでの社会を一変させる程の**変革**をもたらした。**人口**も気候変動で再び寒冷化が進み減少した縄文末期の８万人から、６０万人に増加したといわれている。（*6）
そして**青銅器**や**鉄器**等**金属器**の新技術も加わり、新しい弥生時代へとその姿を根底から変えていく。

（１）稲作・金属器の伝来と社会構造の変革（クニの成り立ち）

・狩猟・採集から食料を生産する時代へ（富や権力の発生と階層社会の出現）

渡来民からもたらされた稲作の技術が人々の食生活を豊かにした結果、人々のライフスタイルを**「狩猟・採集で食料を得る時代」**から**「食料を生産する時代」**へと 180 度転換させた。稲を栽培するためには広い水田と水を張るための水源や水を引き込むための灌漑工事が必要となる。灌漑工事をするためには多くの人手を必要とし、良い耕地や多くの人手・水資源を持つ者と持たない者とでは収穫量に大きな差が出ることで、**富める者**と**貧しい者**という**富の格差**が生じる。皆で一緒に山野や水辺に食料を採りに行き、皆で分け合うというそれまでの平等な社会構造が一変した。

やがて、富める者とそうでない者という構造は、**権力を持つ支配する者**と**支配される者**という構造に変化する。

稲作は豊かな実りと引き換えに、**富める者と貧しい者**、**支配する者と支配される者**という**差別**と**階層社会**をもたらしたという見方もできよう。

・ムラからクニへ（戦争の時代の始まり）

人々の集まった集落は支配者を中心とした集団の**ムラ**へと変化する。支配する者と支配される者という構造は、人間関係だけに留まらず富や権力を巡って**ムラ同士の争い**も勃発する。強いムラはますます強く大きくなりやがて**クニ**へと発展する。そしてクニ同士が争う**戦争の時代**へ突入する。戦争はこの時代米とともに渡来した**青銅器**や**鉄器**という**金属器**の影響が大きいが、やがて青銅は**銅剣**や**銅鐸・銅矛**（どうほこ）のような祭祀用へと用途が変化していく。

しかし、この時代はただ戦争に明け暮れていただけでなく、何よりこの時代の名称になった、実用品でありながら芸術品のように精緻で優雅な**弥生土器**を生み出し、以後の日本文化へ果たした貢献度は計り知れない。

（２）倭国大乱と邪馬台国/女王卑弥呼

中国の歴史書『**後漢書**』によると、２世紀の後半**倭国**（わこく）と呼ばれた日本は百余国に分かれ、土地や鉄資源等を巡って互いに相争う**倭国大乱**と呼ばれる戦乱の世に突入していった。そしてこの争乱は**邪馬台国**の**卑弥呼**を女王として立てることで収束に向かった。また、卑弥呼は魏に使いを送り『**親魏倭王**』の称号と強い後ろ盾を獲得する。

・環濠集落 吉野ヶ里遺跡

倭国大乱の時代それぞれのクニは他国との戦争に備え、中核のムラは周囲を**環濠**（かんごう）と呼ばれる濠（ほり）で囲み、間に**逆茂木**（さかもぎ）等の**防護柵**を巡らした堅固な防御施設を備え、内部には四方の敵を監視する**見張り櫓**（やぐら）を設けて万全の防御体制を敷いた。そして中期以降、より防御しやすい立地の**高地性集落**も登場する。

広々とした平野には遠くの八甲田山以外何も隔てるものもなく、どこまでも広がる縄文時代を代表し平和の象徴のような三内丸山遺跡とは対極をなすものといえよう。この時代を代表する巨大な環濠集落としては、**吉野ヶ里遺跡**（よしのがりいせき/佐賀県）、後期の**唐古・鍵遺跡**（からこ・かぎいせき/奈良県）がある。

・吉野ヶ里遺跡

1989 年に報じられて以来、邪馬台国の所在地ではないかと一大ブームを巻き起こした吉野ヶ里遺跡は、佐賀県吉野ヶ里町と神埼市にまたがる吉野ヶ里丘陵にあり、国の**特別史跡**に指定された弥生時代を象徴する環壕集落遺跡である。幾重にも巡らされた濠や防御施設や見張り櫓、中央の大きな建物は当時の権力者の威勢を物語っているが、あたかも戦国時代の砦や要塞を連想させる。

写真出典）西日本新聞、2023/06/01

７．３古墳時代（倭（ヤマト）王権の成立と前方後円墳の全国拡大、戦いではなく古墳の壮大さで覇を競う）

古墳時代とは弥生時代から**律令制**の確立する**飛鳥時代**に至る、３世紀中頃から７世紀までおよそ 350 年続く、１６万基もの**前方後円墳**（ぜんぽうこうえんふん）が作られた時代を指す。中央王権は前方後円墳造りを、王権との繋がりや威光を利用したい地方豪族に許可し巨大土木工事の競争をさせることで、軍事力を使うことなく地方権力を消耗させるという賢明な狙いがあったのではないか。中央王権と王権の権威を利用したい地方豪族とが前方後円墳を通じて win-win の**関係**を築いたものと推察する。それはまた、地方ごとに存在した**クニ**という単位を統合し、全国規模の**国家**へと統合・発展させて行った時代であり、後の**大王**（おおきみ：**天皇**）を頂点とする日本の**古代国家**の基盤を形作った時代でもある。

（１）倭（ヤマト）王権と連合国家

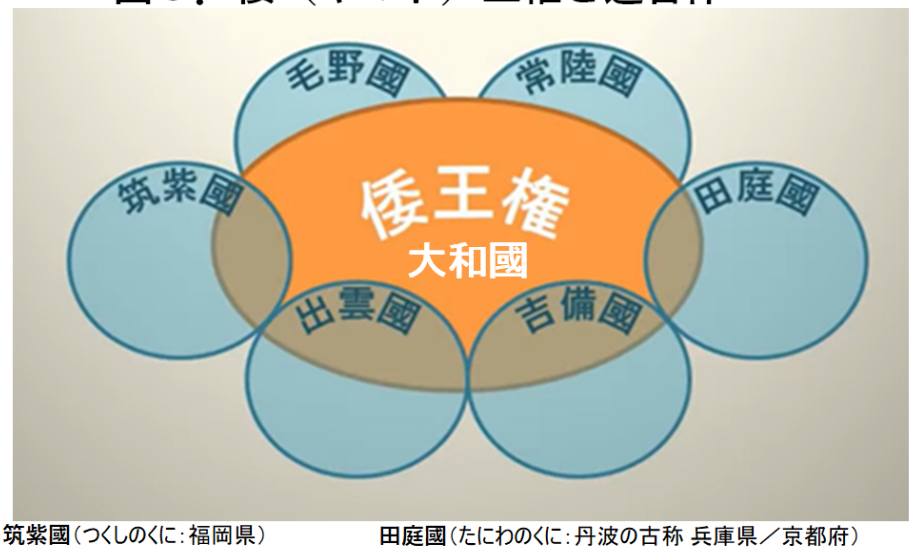
・倭（ヤマト）王権の構成

連合体としての倭（ヤマト）王権は図９に示すように、**大和國**（やまとのくに：奈良県）を中心に、九州から関東に至る**筑紫國**（つくしのくに：福岡県）、**出雲國**（いずものくに：島根県東部）、**吉備國**（きびのくに：岡山・広島・兵庫・香川県）、**田庭國**（たにわのくに：丹波の古称：兵庫県・京都府）、**常陸國**（ひたちのくに：茨城県）、**毛野國**（けぬのくに：群馬県・栃木県南部）にいたる、全国有数の７豪族で構成された**連合国家**である。

大和が連合国家の中核を占めたのは、リーダーにふさわしい強大な権力を持っていたことが一義であるが、王権を構成する九州から関東の中心に位置するという立地条件、さらに日本海ルートや九州ルートに至る、全国や海外までも結ぶ交易ネットワークの要衝という条件の良さからも中核を成すのは必然といえよう。

図９．倭（ヤマト）王権と連合体

図９．倭（ヤマト）王権と連合体



筑紫國（つくしのくに：福岡県）　田庭國（たにわのくに：丹波の古称 兵庫県／京都府）
出雲國（いずものくに：島根県東部）　常陸國（ひたちのくに：茨城県）
吉備國（きびのくに：岡山県、広島・兵庫・香川県）　毛野國（けぬのくに：群馬県、栃木県南部）
出典）YUKI-YA https://www.youtube.com/watch?v=5Yvoju7xuAc&t=29sに加筆

・ヤマト王権の発祥を告げる纒向遺跡と箸墓古墳

古来、山そのものがご神体と崇められている**三輪山**（みわやま）の麓に、1.5 キロ四方に達する巨大な人工都市**纒向**（まきむく）**遺跡**が出現する。全国各地方の日用品が出土することからも、各地から中央に派遣された人々が常駐する、連合国家であるヤマト王権の**首都機能**を持つ都市であったとみられる。

同時期、纒向遺跡に近く聖なる三輪山を望む地に、全長 276 メートルにも達する史上初の巨大な**前方後円墳・箸墓**（はしはか）**古墳**が出現する。その威容や**宮殿跡**も出土した纒向遺跡の近くであることから、卑弥呼の墓ではないかとも言われている（**邪馬台国畿内説**）。

また 2023 年 7 月、近くの**茶臼山古墳**（204m）から桁違いに多い 103 **枚**におよぶ**銅鏡**が確認された。この事実からヤマト王権は従来言われていた**ゆるやかな連合体**ではなく**強力な支配者による王権**の可能性も考えられる。中国の史書に記録はなくとも、全国に 16 万基もありこの時代を物語る前方後円墳の更なる調査・検証が必要となろう。（*7）

・空白の四世紀と倭の五王、仏教の伝来と次代への胎動

突然のように出現した巨大な前方後円墳が大和の地から広がりを見せた３世紀後半から、王権がほぼ確立したと思われる５世紀初の**倭の五王**（**讃・珍・済・興・武**）が中国に使者を遣わすまでの１世紀の間、中国の史書に日本につ

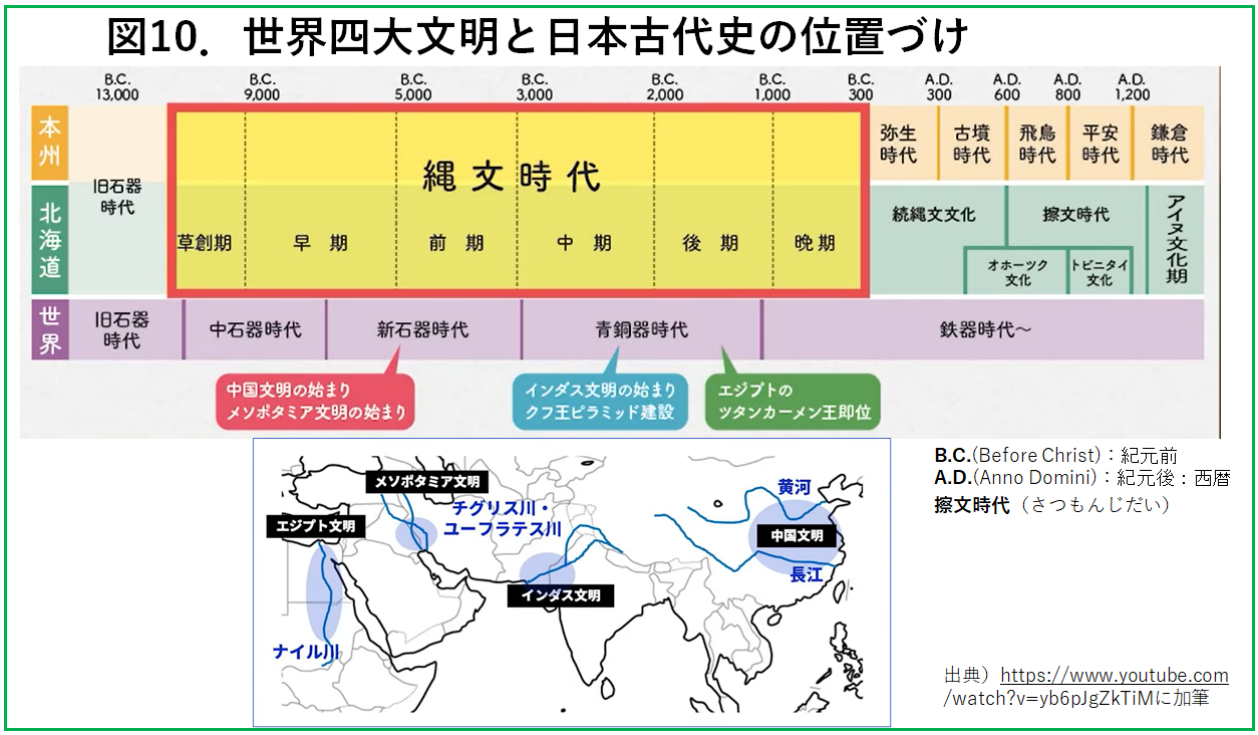
いての具体的な記録が見られないことから、**空白の四世紀**ともいわれる。

この時代、中国からそれまで日本には無かった**文字（漢字）**が伝来する。また、万物に神が宿るという宗教観が根強い神の国でもあるこの国に、**仏の教え**と**仏像を崇拝**する**仏教**ももたらされた。仏教の伝来は**蘇我氏**と**物部氏**（もののべし）に象徴される中央政権内の深刻な対立にまで発展し次の飛鳥時代へと向かう。そして**古墳の築造熱**は冷め、**仏教寺院の建立**（こんりゅう）**熱**へと移行していく。

８．世界四大文明と日本の古代史の位置づけ

古代に発生した**世界の四大文明（メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・中国文明）**は、日本と異なりいずれも**大河の流域**で**農耕や牧畜**を中心に繁栄した。しかし図 10 に示すように、**メソポタミア文明**や**中国文明**は**縄文時代・前期**に相当し、**インダス文明**や**エジプト文明**は**縄文時代・中期/後期**に相当しており、縄文時代が世界の古代史においても最古級の文明社会として位置づけられる。他の文明に比べピラミッドのような**巨大建造物**がないことが欠点のように指摘されるが、巨大建造物は**権力者**に**富や権力**が集中し、民衆を圧迫した**格差社会の象徴**であり、そのような遺跡がなく１万年以上も続いた**平等で平和な社会**こそ、縄文時代ひいては日本古代史の誇りであると信じる。

図 10.　世界四大文明と日本史の位置づけ



・おわりに

今からおよそ２０年程前、たまたま出かけた三内丸山遺跡の真っ青な空にそびえ立つ大型掘立柱の前に立った時、何故かそれまで感じたことのない、清々しくも爽やかな言いしれない感動に身が震えた。自分の中に縄文の血が流れていることを初めて感じた瞬間であり、人生最大の感動でもあった。この度機会を頂き、日本の歴史を学んだこともない身の独断と偏見から勝手に古代史を論じてきたが、日本の古代史も日本という範疇だけで語るのではなく、**世界の中の日本、世界史の中の日本史**という観点でもっと語られて良いと思う。私達の祖先は世界に誇れるだけの業績を残して来たし、縄文の文化と遺跡は世界遺産に登録された。今に生きる私達も先人の作った歴史を誇って良いと思う。何よりそれは祖先への恩返しになるだけでなく、今後私達が激動の世界を生きていく為の原動力になるのだから。

【脚注】

（＊1）神澤秀明、縄文人の核ゲノムから歴史を読み解く、2015、www.brh.co.jp/publication/journal/087/research/1

（＊2）金沢大学、パレオゲノミクスで解明された日本人の三重構造、https://www.kanazawa-u.ac.jp/rd/96414

（＊3）NHK ETV 特集「奄美・アイヌ　北と南の唄が出会うとき」、2021/11/6

（＊4）ＤＮＡチップ研究所、https://www.dna-chip.co.jp/oshiete/

（＊5）松木武彦、日本古代の新常識、2023

（＊6）YUKI-YA、https://www.youtube.com/watch?v=m0e0P0x8BkA

（＊7）奈良新聞、2023/09/07、https://www.nara-np.co.jp/global/2023090701001247.html